実践型地域研究ニューズレターno.35

ざいちのち

実践型地域研究ニューズレター—No.35　2011 年 9 月

まちやむら、そこに住む人びと（ざいち）の、
知恵や生き方（=ち）から学び、実践する活動です。

京都大学
学際融合教育研究推進センター　生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

滋賀県高島市今津町
椋川の秋

朽木フィールドステーション

夏の火、春の火：火をめぐるわきまえ

朽木 FS 研究員　増田和也

「昔は山奥や谷奥にもヤマバタを拓いていた」。「盆過ぎになると、あちこちで煙が上がっていたもんや」。「ときどき燃え広がることもあったが、火が山を越えて（福井県側に）いくことはなかったな」。長浜市余呉町中河内の伐開現場に火を入れようとするなか、集まった地区の方々が当時のことを話された。火入れを前に私はいささか緊張気味であったが、こうした会話を聞きながら、当時の様子を思い浮かべるうちに和んだ気分に包み込まれていった。

8 月も下旬となり、今年も焼畑予定地に火を入れる季節がやってきた。中河内の現場では 7 月 2 日に伐開作業をおこなった。伐採した草木は十分に乾燥した後に火を入れる。当初の計画では 8 月 19 日に火入れを行うことにしていた。この 8 月の前半には晴天が続き、強い日差しによって伐採した草木はよく乾燥していると思われ、このままいけば火入れは上手くいくだろうと期待された。しかし、盆が明けた頃から雨模様の天気が続くようになり、天気予報をみながら 19 日の火入れを 25 日に延期した。やがて、その日が近づくにつれて週間予報にはふたたび雨マークが続くようになり、こうして中河内の火入れは再延期を余儀なくされ、30 日にようやく行うことができた。天候に振り回された今年の火入れであった。

8 月 30 日。3 日前の晩に雨が降ったというが、その後はまずまずの天気が続いており、地面はそこそこ乾いているようであった。この日、火入れには地元から 11 人、我々を含めた外部から 18 人が集まり、結構なにぎわいとなった。火を入れる前に我々が防火用のポンプを準備していると、ある地元の方がこういった。「この状態では、火は横や下には燃え広がらないよ。怖いのは上だけだな」。尋ねれば、これまでの経験から、地面の乾き具合や斜度、伐採した草木の量などをみて、そう思うのだという。冒頭に記した地元の方の言葉にも表れているように、地元の方は火入れに対して大らかであるような印象を受ける。野山を拓いて火入れをしたいという私たちの希望を受け入れてくださったのも、このような経験にもとづいて判断してくださったのかもしれない。

写真：火入れ前、山に向かって祝詞をあげる。無事に終了しますように。

しかし、こうした火入れに対する大らかさはこの時期の火入れに限ったものである。その方は春先の火の怖さを教えてくれた。夏の火は赤く、目ではっきりと確認することができる。一方、「春の火は見えへんのや。いつのまにか、ちょっと先で火が燃え広がっている。あれは怖い」。

かつて中河内の集落は大火に二度も見舞われたことがあるといい、地元の方々は火の恐ろしさを十分に知っているはずである。火は怖いものであるが、上手く扱うことができれば、その力を活かすことができる。地元の方の話は火に対するわきまえを教えてくれているような気がした。

写真：
中河内での火入れ。夏の火は赤く、目に見える。

お知らせ

1.　余呉の焼畑　今後の予定
間引き・電柵張り：9 月中旬～下旬　中河内、赤子山
収穫：赤子山 11 月 5 日（日）、
　　中河内 11 月中旬の週末

2. 焼畑の様子をお伝えしよう、とブログを始めました。作業風景や作物の生育など、お楽しみください。
http://hinoyamahiroba.seesaa.net/
（火野山ひろばブログ）

保津川（桂川）の源流を訪ねて

亀岡 FS　河原林　洋

日々、保津川遊船企業組合の船士（せんし）として、船頭業を生業とする私だが、これまで保津川の源流を訪ねたことがなかった。「源流を知らずに川を語ることなかれ」ということで、保津川の源流を訪ねてみた。

京都市左京区花脊大布施町にある京都市左京区役所花脊出張所の職員の方に、桂川の源流域について尋ねてみると、京都市右京区広河原尾花町の上流にある「ネジリキ谷」を教えられ、日々その谷に入っている K さんを紹介された。K さんは、15 年ほど前まで約 25 年間にわたって山で炭を焼き、地元の山を熟知した方である。ネジリキ谷の上流にある「洞（ほら）」と呼ばれる谷が最も源流に近いという。

図 1:京都市左京区広河原下之町付近の桂川

府道 38 号線を佐々里峠に向けて北上し、京都バス・花脊線の終点、広河原停留所付近(出合橋)を右折して林道に入る。ネジリキ谷の最北端才谷口までは、林道が整備されていた。そこで西に洞、東に東才谷と分岐している。そこからは徒歩である。はじめは渓流沿いにかつての林道を歩いたが、だんだん川に入らないと先に進めなくなり、我々の侵入を拒むがごとく樹木などが行く先をさえぎり始めた。残念ながら、今回はそこで断念せざるをえなかった。

洞の谷の清らかな渓流
（筆者撮影）

梅雨の増水で日々濁流と化していた保津川とは違い、洞の谷川は清流そのもので、この水を生活の糧としている私にとっては神々しい水の流れであった。かつて、多くの人々は自然を生活の糧としていた。それだからこそ、山や川に神々を祀り、自然を大事にしていたのであろう。今もこの洞の谷の奥には洞の観音さんが祀られ、その前の手水鉢のような岩の水をかき混ぜると雨が降るという言い伝えがある。今回、この観音さんを拝むことができなかったことが心残りである。

その後、K さんより紹介された広河原下之町に住む古老 T さんを訪ねた。T さんは昭和 4 年生まれの 82 歳。父親は木材問屋で、筏師の手配も行っていた。家の前の川は筏のトメ場で、上流の谷川から流れてきたカタゴ筏と呼ばれる小筏は、本筏と呼ばれる大きな筏に組み直された。かつては、トメ場に使われるほど川幅（約 20m）も広い場所であったが、昭和 24 年のヘスタ台風の時、下之町の集落は全滅するほどの被害に遭い、田畑は川原と化し、今では河道も変わって当時の面影もない。

広河原下之町にあった筏のトメ場付近の現景(筆者撮影)
家が建つ場所を、かつては川が流れていた。

T さんは子供の頃、流れる筏に飛び乗って遊んでいた。男の子の度胸試しでもあった。今では危険だとして怒られそうな話であるが、当時の筏師たちはあまり怒らなかった。なぜなら、未来の筏師に筏の経験を積ませているようなものであったからだろう。

保津川の源流に触れ、神々しい川の流れに感動しながらも、自然とたわむれることのなくなりつつある時代に、自然とともにある伝統産業（水運業）をいかに継承していくのか、机上では決して解決しないこの問題に対処する術（すべ）を考えずにはいれなかった。

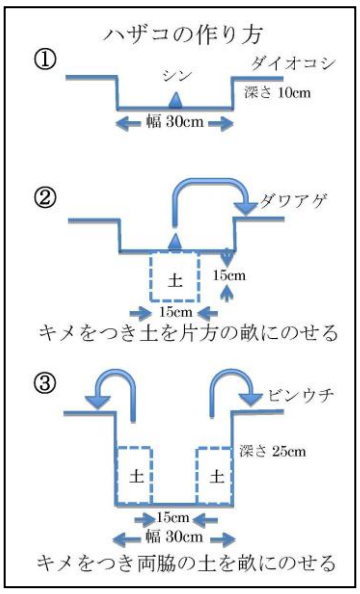
機械化以前のコメ作り：田ごしらえ

守山ＦＳ研究員　藤井美穂

戦前から 1970 年頃まで、開発集落の全戸数は約 85 戸だった。１戸の田の所有面積は約 10 反（1 反は 10 アール）であり、開発には 800～850 反の田があった。田の状態によって呼称がある。「アキタ」とは一毛作の田であり、自家用の飯米を耕作する田を「カラトダ」という。砂地の多い田で美味しいコメができる田をカラトダにしている人がいた。野洲川の伏流水の湧水が流れてくる湿気の多い田を「ドボケ」と呼び、乾いた田は「乾田」という。砂利や砂地が多く、水が抜けてしまう田を「カゴ田」と呼ぶ。

次に、戦後から 1961 年頃までの開発における一毛作田の田ごしらえまでの過程について、A さんと N（男性 84 歳）さんの聞き書きから述べたい。

田ごしらえとは、「田植えをするために、土を細かく砕いて田を平らな状態にする」（A さん 85 歳）ことをいう。2 人がハザコ（畝と畝の間の溝）をつくる作業を詳細に話されたことから、田ごしらえについて、ハザコをつくり替えていくことにより、土に空気を入れてならしていくことだと理解した。



１月、正月がすんでから田に牛肥を並べる。それから牛にカラスキを 2 回ひかす「ダイオコシ」を行い、幅約 30cm、深さ約 10cm のハザコをつくる。次に、「ダワアゲ」をする。ダワとはカラスキなどで土を鋤いた後に残る土のことである。ダイオコシをした後に、ハザコの中央に線状に残ったダワを「シン」という（図①参照）。シン（幅約 3cm、高さ約 3cm）の両側を鋤でキメをついて（切れ込みを入れる）、片側の畝の真ん中にシンをあげるのを「ダワアゲ」という（図②参照）。ダワアゲの後、幅 30cm の浅いハザコの真ん中に鋤の幅約 15cm、深さ約 15cm の溝ができる。次に、ダワアゲでつくった溝の両脇に残っている土をその溝と同じ深さ（約 15cm）に鋤でキメをついて畝に土をあげるビンウチを行う（図③参照）。田に幅約 30cm、深さ約 25cm のハザコができあがる。ハザコに乾いたワラを敷く。ワラは鋤が土に入りやすく肥料にもなった。半月後、牛に土キリ機械を 1 回ひかして、畝の土を細かくする土キリをする。

3 月、牛にカラスキをひかして、1 月に作ったハザコに畝の土を戻して平地にするアラガエシを行う。次に、1 月に畝であった所でダイオコシ、ダワアゲ、ビンウチを行い、新たにハザコをつくると、同月にハザコであった所には畝ができる。畝の土キリを行い、アラガエシをして平地にした。最後に、アラワケといって、カラスキの細い方の刃をねかして牛に 2 回ひかして、平地に残っている畝のシンを削って平らにした。

アラワケがすむと、6 月上旬から中旬にかけて田に水を入れ、6 月 20 日過ぎに行う田植えまでに代かきを行った。田ごしらえは、田植えや草取りを楽にするためであった。

「『土を細かくすればするほど米ができない』と先人は言うが、田植えや草取りの作業に影響がでてくる。田の土が荒く、表面の高低があると、高い所は干せて、かんからぼん（カラカラ）になっていて、苗を植える時に土に手がさせへん。そやから、水をはった田の表面はマンガン（代かき）して鏡のようにシャンとしとかんと後で苦労する」（A さん）。

牛にマンガン（馬鍬:まぐわ）[1]をひかせて土を細かく砕くのを荒マンガンといい、1 回行った。次に、コマザラエを牛にひかして仕上げをした。田植えの前日に、仕上げができていない田の四隅の畔のネキ（側）の土を六つクマデでならす「シルツクリ」を行った。「マンガン」ができていないと田の土が硬くて苗をさせないので、田植えに雇った女性たちに、「ここは横着や」と文句を言われたという。

表1　一毛作田の田ごしらえの過程

時期	作業	
1 月	牛肥を並べる	
	畝を作る	ダイオコシ
	ハザコを作る	ダワアゲ、ビンウチ
	ハザコにワラをしく	
	畝の土を細かくする	土キリ
3 月 または 4 月	ハザコを埋めて平地にする	アラガエシ
	畝のつくりかえ	ダイオコシ
	ハザコを作る	ダワアゲ、ビンウチ
	畝の土を細かくする	土キリ
	ハザコを埋めて平地にする	アラガエシ
	平地の仕上げ	アラワケ
4 月	田に水を入れる	
5 月末 ～6 月	代かき	荒マンガン
	仕上げ	コマザラエ
田植えの前日	田の四隅の土をクマデでならす	シルツクリ

[1]　長さ 1 メートル前後の横の台木に 8～10 本の刃を櫛状に取り付けた農具で、牛馬に引かせて田の面を広くかきまわす。

催しのご案内

■ いかだにのってみよう!!（保津川筏復活ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ 2011）

1. 日時：平成 23 年 9 月 10 日（土）13:00～16:00
2. 場所：保津川下り乗船場向かいの河川敷(JR 亀岡駅徒歩 20 分)
3. 主催：京筏組(保津川筏復活ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ連絡協議会)

お問い合せ：亀岡市文化資料館　Tel:（0771-22-0599）
E-mail: bunka-siryokan@city.kameoka.kyoto.jp
URL: http://hozugawa.org/program/ikada.html

■ 第 38 回 定例研究会

1. 日時：平成 23 年 9 月 30 日（金）16:00～19:00
2. 場所：守山 FS（滋賀県守山市梅田町 12-32）
3. 発表：朽木 FS 担当　（発表者未定）
   発表タイトル:「未定」
   発表者･発表タイトルは、決まり次第お知らせします。

＊連絡は、京都大学 東南アジア研究所 実践型地域研究推進室（担当：矢嶋　yajima@cseas.kyoto-u.ac.jp ）までお願いします。

「むら」の幸せってなんかねぇ？
ー「文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議」開催報告ー

東南アジア研究所　中村均司

平成 23 年 8 月 1 日～3 日、山口県阿武町で標記国際会議を開催しました。これは東南アジア研究所の国際共同拠点公募研究「ミャンマー、バングラデシュ、日本の農村の生存基盤に関する相互啓発実践型地域研究」の取組みの一環であり、本年 2 月京都府亀岡市で開催した会議に次ぐものです。今回は京都大学生存基盤科学研究ユニット、京都大学東南アジア研究所、高知大学自然科学系「中山間プロジェクト」、阿武地域グリーンツーリズム推進協議会の共催、阿武町と山口大学エクステンションセンターの後援で開催されました。

1 日目は、『阿武町から「むら」を考え直す公開セミナー』として町民にも広く参加が呼び掛けられました。安藤和雄（東南アジア研究所）の基調講演と中村秀明町長のコメント（セッション①）に続き、高知県大豊町怒田集落からの報告（同②）が行われました。市川昌広さん（高知大学）と氏原学さん（農家）の集落の存亡をかけた取組みに参加者は熱心に聞き入りました。セッション③の「アジアの村」は、ソンパーン・パスワンさん(ラオス国立大学)、矢嶋吉司（生存基盤科学研究ユニット）、イエーゼルさん(ブータン王立大学)、キン･ウーさん(イエジン農業大学、ミャンマー)、ミンツ・ミャット・モエさん(イエジン農業大学院生）が各々の国や地域・大学での農村開発や教育・実践活動を紹介しました。

写真1:
町民参加の公開セミナー

2 日目は阿武町の現地視察(エクスカーション)が行われました。作付されていないほ場整備田、海を臨む棚田と御山神社、宇生賀地区などを実際に見て、阿武町の良さや課題などについて理解を深めました。尾無集落では漁師で阿武地域ＧＴ推進協副会長の茂刈達美さんから漁港などを案内していただきました。30 年前に消滅した集落の復活に取り組む「あったか村」では安藤公門さんたちから説明を受けました。

写真2:現地視察
（左:あったか村での説明を聞く参加者、右:御山神社）

午後は宇生賀地区の村づくりの取組みについて田中敏雄さん(農事組合法人うもれ木の郷・事務局長)、山本勉生さん(うもれ木の郷･組合長／宇生賀中央自治会・会長)、原勝志さん(うもれ木の郷･事務局長)、原スミ子さん・西村静江さん・池田悦子さん(四つ葉サークル)からそれぞれ設立の経緯や現状と将来について、また、梅田晃さん（阿武町役場福賀支所長)、藤村素臣さん(JA あぶらんど萩・福賀支所長)、岡十郎さん(宇生賀の長老)から行政・農協との連携や歴史について報告がありました。最後のセッションは京都近郊のむらとバングラデシュのむらについて、南出和余さん（桃山学院大学)、藤井美穂（生存基盤科学研究ユニット)、中村均司、安藤和雄がそれぞれ地域の状況や活動について報告しました。

3 日目は宿をお世話になった農家民宿のご主人で阿武地域ＧＴ推進協会長の白松博之さんから「山里の暮らし」についての話のあと、「むらを見つめ直す総合討論」が時間を延長して行われました。

今回の国際会議は、参加対象を一般の地元住民まで広げ、50 名を越える参加者があったこと、阿武町の山林・田畑・海や集落など町全体を見て回ったこと、女性の参加も多かったことなど、が特記されます。地元や海外の参加者にも好評で、『国際会議の井戸端版としてお互いの距離が近くなるように感じた。アジアのむらが幸せでありたい･･･』(阿武町参加者)との感想も寄せられ、参加者一同が「むら」の幸せってなんかねぇ？を問い続け、話し合い、実践していく相互啓発となりました。

最後に本会議の企画・運営にご尽力いただきました辰己佳寿子さん(山口大学)と阿武町役場の皆さんにお礼申し上げます。

発行：〒606-8501　京都市左京区吉田下阿達町 46
京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/pas/
編集: 矢嶋吉司・荒木一子